

YOKOHAMA SOEI JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

SCHOOL GUIDE BOOK 2023



横浜創英
中学・高等学校

2023年度
入学生用



自律 Autonomy

PDCA
Plan-Do-Check-Act
メタ認知能力
Metacognitive Skills
セルフコントロール
Self-control



対話 Dialogue

リスペクト
Respect
パブリックリレーションズ
Public Relations
コラボレーション
Collaboration



創造 Creation

クリエイティビティ
Creativity
クリティカルシンキング
Critical Thinking
情報リテラシー
Information Literacy

もう、 誰のせいにもするな。

日本はもう、取り返しのつかないところに、足を踏み入れようとしている。
脆弱なデジタル環境、環境問題への低い意識、国際化への乗り遅れ。
複雑な社会問題は、対立とねじれを繰り返し続ける。

それなのに、私たちはどこか他人事だ。

国か、政府か、偉い人たちか。とにかく誰かが、きっと何とかするだろう。

そうやって、次の世代を不幸にする問題は、また大きく、ふくれあがっていく。

このままで、いいはずがない。

誰かのせいにしていても、何も変わらない。

自分で考え、行動できる人が、今の日本には必要だ。

世界では、自律・対話・創造に重きを置き

当事者意識を持った人を育てるため、教育改革が進んでいる。

それなら、横浜創英は、もう日本のせいにはしない。

私たちから、変えていく。それが、私たちが考えて決めたことだ。

そして、あなたはどうしたい。

建学の精神

「考えて行動のできる人」の育成

「考えて行動のできる人」が持つべき力

3つのコンピテンシーと9つのスキル





日本社会が抱える課題。
その原因は、学校教育に。



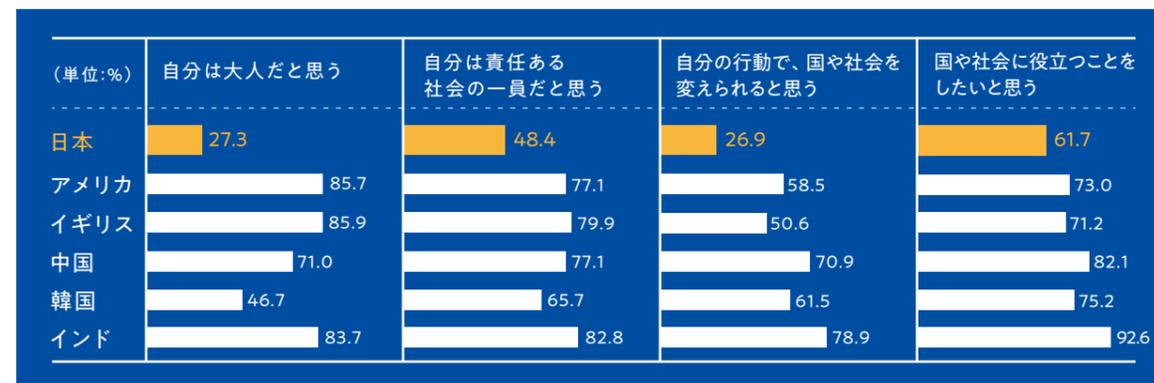
学校教育は
どこに向かうべきか。

日本の学校教育は、 何より大切なものを奪ってしまった。

明治以降150年、大きな変化を起こすことなく
ここまで続いてきた、日本の学校教育。
そのなかで、日本社会が失ってきたもの。
与えることばかりにとらわれた、学校教育が奪ってきたもの。
それは社会の一員として行動する「当事者意識」、というものです。

「自分には、社会なんて変えられない」、と思う日本の学生。

各国の若者が、国や社会をどう捉えているかが浮き彫りになる「18歳意識調査」(下図参照)で、日本は非常に低い数字を示しています。
そしてご存知の通り、日本経済は低迷を続けています。2020年の労働生産性についての調査では、OECD加盟38か国中、日本は28位。1970年以降、最低の順位です。横浜創英は、この事実と先のデータが、日本の学校教育の問題点を示していると考えます。



※ 18歳意識調査「第46回-国や社会に対する意識(6カ国調査)-」報告書/日本財団(2022年)

日本の教育を、 いまずぐにでも世界基準に。

学校教育の改革こそが、日本の抱える問題の解決につながる。
では、学校は何を目指して改革を進めればいいのか。



世界の教育はどこに向かっているか。

「OECD Education 2030」でもふれられているように、世界の教育トレンドは
知識や技術の獲得ではなく、素養(=コンピテンシー)の獲得を目標に設定しています。

自己決定できる人材の育成

不確かな時代においては、目標を設定する力や、その達成のために必要な行動力が求められます。学校教育においても、主体的に行動を起こす経験を積むことが重要と考えられています。

ジレンマを解消できる人材の育成

複雑化する社会では、多様な考え方を認め合い、互いの利害を調整する力が必要です。その習得のためには、相手を理解し、合意点を見つけ出す対話の技術を身につける必要があります。

これからの学習者。

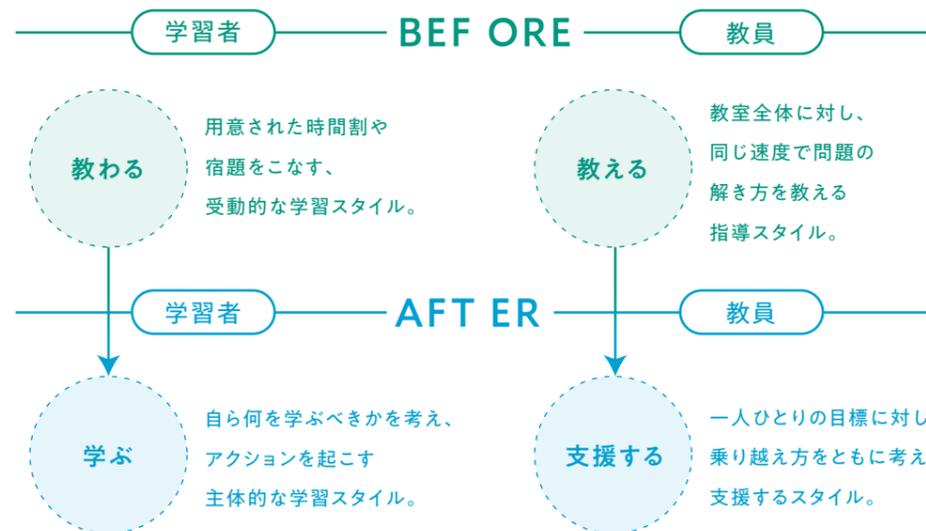


これからの教員。



自ら学ぶ。 目標に向かって行動する人。

「自律」と「対話」、そして「創造」のコンピテンシーを身につけるには、目標達成のために学ぶのは自分自身であるという当事者意識を持つことが必要です。毎日の授業をこなす、与えられたテストで点数を取ることが目的になるのではなく、より良い社会を創るにはどんな学びが必要かを考え、そのための行動を起こすことができる素養が求められます。学びを社会につなげ、教員や仲間と協働して力強く学んでいく。能動的な学習スタイルを身につけていきます。



与えない。 学びを支援する人。

「一方的に教える授業」「たくさんの課題・宿題」は、主体的に考える力を奪っていきます。横浜創英では、教員間で「3つの言葉掛け」を徹底しています。もし困っている生徒がいたら「どうしたの?」、次に「きみはどうしたいの?」、最後に「私に支援できることはある?」。初めのうちは、何をしたいのか、答えられない生徒がたくさんいます。しかし、これらの問いを繰り返すことで、「自分のやりたいことは何か」を考え始めます。生徒たちは、このプロセスのなかで学びの目的を見つけ、自律して学び始めます。

さあ、「これから」。
創英がやめること。

創英がはじめること。

横浜創英の最上位の教育目標は、「考えて行動のできる人」の育成。そのためには、これまでの学校教育の「当たり前」を見直して子どもたちが自律して学んでいく仕組みを作っていくことが大切だと考えています。社会背景・世界水準を意識して、横浜創英が始めていく改革。もしかしたら、そのいくつかは常識から外れた、突飛な試みに見えるかもしれませんが。でもこれらはすべて、子どもたちを当事者に育てていく最適な手段だと、私たちは考えています。

Start

固定担任制を、やめる。

なぜやめるのか？

年間を通して、同じ生徒を同じ教員が管理する固定担任制は、学校側にとっては効率の良い手法でした。しかし、「あっちのクラスの担任はアタリ」「いくらがんばってもこの先生とは合わない」という意識を持つ生徒が存在するのも事実。固定担任制は、生徒たちの他責思考を生み出してしまいます。



全員担任制を、はじめる。

なぜはじめるのか？



担任がいなければ、生徒は自ら動き出します。勉強のことも、進路のことも、学校生活のことも。自分の悩みに合わせて、目的に応じて面談する先生を選ぶこともできます。課題を乗り越えるのは自分自身、「自律」を促す仕組みとして、創英は中学校にて全員担任制をはじめています。

教師が一方的に教える授業を、やめる。

なぜやめるのか？

教員が教壇に立ち、同じ授業をクラス全員に一方的に教える。この当たり前のスタイルの問題点は、「一人ひとりの理解の違いに向き合っていない」という点。理解が遅れている生徒にとっても、進んでいる生徒にとっても、非効率な時間が放課後まで過ぎていきます。



生徒が学ぶ授業を、はじめる。

なぜはじめるのか？



教員が教えないとどうなるか。生徒は自分の強みや弱みを意識し、「できない」を「できる」に変えていくために目標設定するようになります。そして、AI教材の活用や仲間との協働によって、自ら学習を進めていきます。ここでの教員の役割は、「教える」ではなく「支援すること」。これが「生徒主体の授業」です。

学校の中だけの授業を、やめる。

なぜやめるのか？

子どもたちにとって受験は大切ですが、目の前の点数にこだわってしまうと、学びが社会につながりません。1点でも高い点数を取るために、1分でも1秒でも長く机に向かうことが、社会に貢献する学びでしょうか。社会に貢献するための学びは、学校の外にもあふれているはずです。



社会とつながる授業を、はじめる。

なぜはじめるのか？



社会貢献を視点に学んでいくと、子どもたちはより専門的に学びたいと感じるようになります。横浜創英では、連携している大学のプログラムで専門的な学びに挑戦できます。受験の先に何があるか、それを知ること「手段としての受験勉強」の質が上がると考えます。

Case 01 リーダー養成講座



言葉は簡単には伝わらない。そして人は動かない。

横浜創英では、リーダーとは「人が動かないことを知った上で
目標達成のために協働が生まれる言葉を使える人」と捉えています。

価値観の合わない他人同士、思うように動かないのは当たり前。

そのうえで対話を繰り返し、同じビジョンを共有することで、
目標を達成するための働きかけができる人を、私たちは「リーダー」と呼びます。

WHY

なぜやるのか



対立を避けることが リーダーの役割ではない。

先に誤解を解きたいと思います。リーダーの役割は、集団をまとめることではありません。社会的背景も思想も異なるグローバル社会では、一人ひとりが同じ考えを持つということはありません。必ず対立が発生します。その対立を避けて、ある意味で妥協的な解決点を求めて集団をまとめあげる行為は、必ずどこかで齟齬を発生させるか、重要な決定を下すことができない、非常に力の弱い集団を形成する行為です。

対立のジレンマを解消する スキルを身につける場を。

ここまで伝えている通り、これまでの日本の教育では、集団生活のなかで「対立を避ける」「調和を尊ぶ」姿勢を重視してきました。しかし、それでは社会に出たあとで、意義のある決定を下す素養が育たないのです。リーダー養成講座は、決して集団をまとめる手法ではなく、重要な決定を下すために、対立を解消するスキルを身につける、全8回のプログラムです。

HOW

どうやるのか



何を解決すべきか、 課題を捉える「自律」を身につける。

集団を動かすために重要視されるのは「最上位の目標を共有する」ことです。意見が異なるもの同士でも、その共通項を探れば、最適なアプローチが見つかります。そのためには「何を解決すべきか」という、最上位の目標を設定する力が必要になります。講座の前半では、その力を身につけるための「自律」のコンピテンシーを養います。

PROGRAM

- #1 リーダーってどんな人？
- #2 自己を知る・他者を知る(メタ認知能力)
- #3 目標の立て方(多数決の危うさ・最上位目標)
- #4 手段はいろいろある(バリューエンジニアリング)

多様性を知り、 認め乗り越える「対話」を身につける。

リーダーとして次に必要な素養は、一人ひとりの多様性を知ること、そして互いの考えを認め合い、伝え合うためのスキルです。ここで必要になるのが、対話のコンピテンシーです。講座の後半では、他者の意見・考え・目的と、自らの目標を照らし合わせ、それぞれに最適な働きかけをする手法を学びます。

PROGRAM

- #5 人を生かす(基本的考え方と様々な技術)
- #6 対話力:言葉の選択と配列・事実の見極め
- #7 対話力:パブリックリレーション
- #8 対話力:プレゼンテーション

Case 02 生徒がつくる修学旅行



用意された修学旅行は、 最高の思い出に、なるだろうか。

学校が用意したプランでも、生徒たちはきっと楽しんでくれるでしょう。

しかし、青春時代の大切な思い出を、自らの手でつくりだすことができれば、きっともっとワクワクする経験になります。

そして修学旅行が学びの場なら、その準備さえ学びの場にするべき。それが、横浜創英の考えです。

WHY

なぜやるのか



多数決で決まったプラン。 少数派は、どう思うか。

「行き先は北海道か沖縄、どっちがいいだろう?」。これを生徒に問いかけ、多数決で決めさせれば、一見生徒たちに寄り添った修学旅行に見えます。しかし、少数派にとってはどうでしょうか。修学旅行は学びの場であるとともに、一生の思い出の場。どこかで「沖縄の方が良かったな」と思ってしまう時間は、寂しいように思います。そう、多数決という手法は「この学校じゃなければ」と、他責思考に陥りやすい構造になっています。多様性を認めようと謳う教育からかけ離れていることは明らかです。

学校行事は、誰のためのものか。

学校行事は、クラスや学年という集団の一員として全員が動き、協働力を高めるためのものです。しかし、その場を学校主導でつくりあげることは、果たして正しいでしょうか。生徒たち全員が納得する学校行事をつくるには、生徒の手でつくりあげる方が建設的でしょう。学校が準備したプログラムに積極的に参加できない生徒も、この方法なら自ら考え、前向きに参加することが期待できます。

HOW

どうやるのか



旅行代理店との折衝を経て 6つのプランを作成。

横浜創英は、まず「行き先がひとつ」という前提を取り下げました。生徒たち全員が、希望する行き先を選べる状態をつくるためです。有志の生徒がグループに分かれてプランを作成し、さらに旅行代理店との交渉・折衝へ。6つの修学旅行プランを完成させ、学年全員へのプレゼンテーションを行いました。



自ら選んだプランだから。 本気で、前向きに参加する生徒たち。

例えば、北海道を選んだ生徒たちは、2泊3日の間スキー漬け、というプランでした。学校主導で実施した場合、こんなプランはなかなか出てこないでしょう。広島を選んだ生徒たちは、平和学習に取り組みました。行かされる、聞かされる講義とは異なり、生徒たち全員が前向きに学んでいる姿が印象的でした。



Case 03 高大連携



高校生にはまだ早い、という 先入観を捨ててほしい。

横浜創英は、今の高校生に十分な可能性があることを信じています。きれいごとではありません。アプローチ次第では、社会的な課題を分析し、達成可能な未来図を描いて解決し、新たな価値を創り出せる資質を備えている。だからこそ、高校時点で社会とつながる経験を積むべきであり、高大連携は、その重要な柱です。

WHY

なぜやるのか



真似事が通じなくなる、 これからの社会。

近い将来、今ある企業の多くは形を変えていくでしょう。ここまで語ってきたように、情報技術の発展や、課題が複雑に絡み合う社会構造のなかで「これまで通り」が通用しなくなるからです。人口の豊かな時代なら、成功した企業の真似をしていれば良かった。でも、今の時代は真似事ではなく、人が誰もやっていないことを考え、実行していく力がないと、社会を生き抜くことはできなくなっていきます。

社会に必要な経験を、 「高校」が提供する。

横浜創英は、高校生の可能性を信じています。それは将来の話ではなく、現時点で社会に貢献できると考えている、という意味です。そのために、高校という場所を社会で活躍するための場所に変えていきます。社会に必要な経験を、高校が提供していきます。それを基本的な考え方に、社会とつながることを目標としたカリキュラムを構築しています。

HOW

どうやるのか



自身の「尖り」を強く意識できる高校へ。

日本の教育は、高校までを広く浅くのリベラルアーツ(一般教養)の習得期間として、その後の大学・専門学校、大学院で専門的なスキルを身につける構造になっています。この境目を薄くすること、それが創英のめざす高大連携。自分の強みや尖りを高校時代から意識できる環境を構築し、より専門性の高い学びへ、自ら進んでいく構造へと改革を進めていきます。

高校3年の午後からは 「大学生」として学ぶ。

新しい教育課程では高校3年生の午後に自由選択の時間帯としました。通年で大学の講義を受け、それを高校の単位として認定するシステムを構築しています。将来的には、高校時点で受けた講義が大学進学後の単位として認定されるようにする想定です。また、大学が開催する長期休業中の集中講座を公開し、本校の多くの生徒が講座に参加することで、大学や社会とつながることを目指します。

高大接続調印



- 麻布大学 生命・環境科学部
- 清泉女子大学 地球市民学科
- 産業能率大学
- 城西大学
- 城西国際大学
- 法政大学(予定)
- 東京都市大学(予定)

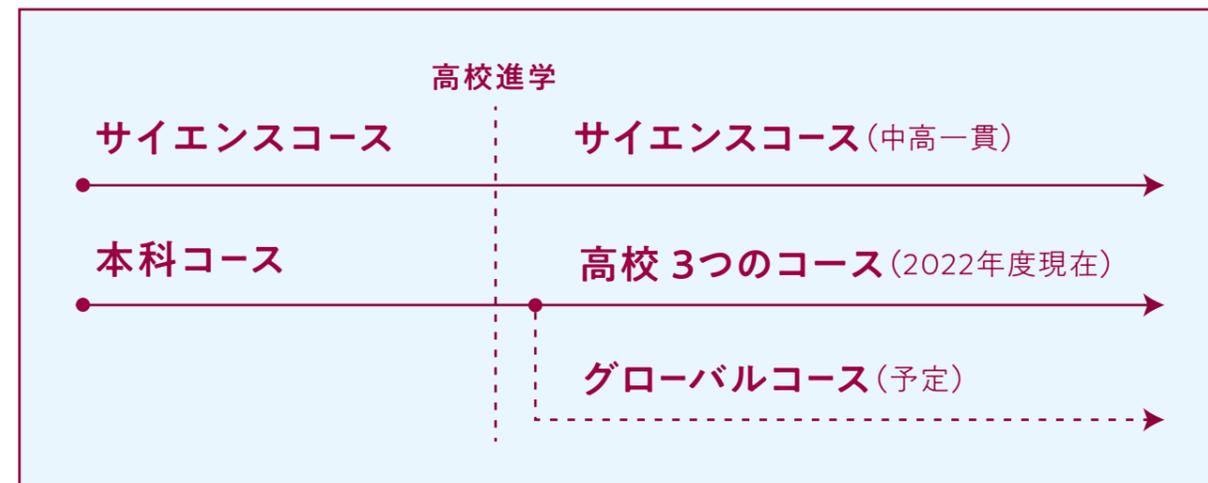


清泉女子大学

中高一貫 [6年間の学び]

COURSE GUIDE 学び方から選ぶ、2コース制

中学校から始まる6年間は、文理融合型の2つのコースに分かれています。ひとつが中高一貫のサイエンスコース。そして、高校進学時から高校入学生とともに学ぶ本科コース。学びの領域ではなく、「どう学びたいか」でコースを選択してほしいと思います。



FEATURE #01 各界の「当事者」たちとの連携

01: マグネット工場から宇宙開発まで手がける技術者・実業家 植松 努 氏
02: 日本のがん研究の第一人者で筑波大学副学長 加藤 光保 氏

令和4年度は総勢28名の協力者と授業を作っていきます。
(順不同・敬称略)

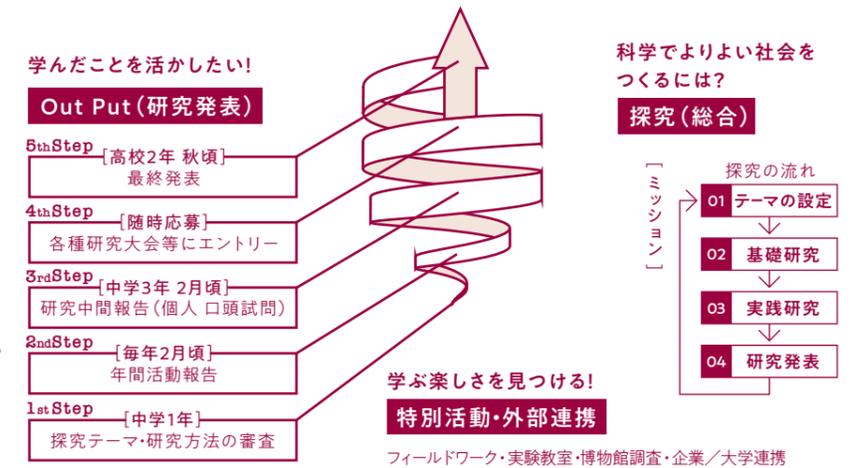
岩元 美智彦(日本環境設計会長) / 鴻上 尚史(作家演出家) / 為末 大(元陸上選手) / 木村 泰子(大阪市立大空小学校 元校長) / 小松 成美(ノンフィクション作家) / 岡田 武史(元サッカー日本代表監督) / 山脇 岳志(スマートニュースメディア研究所・研究主幹) / 宮田 裕章(慶應義塾大学) / 合田 哲雄(内閣府) 他



サイエンスコース

社会課題の解決が、6年間のミッション。

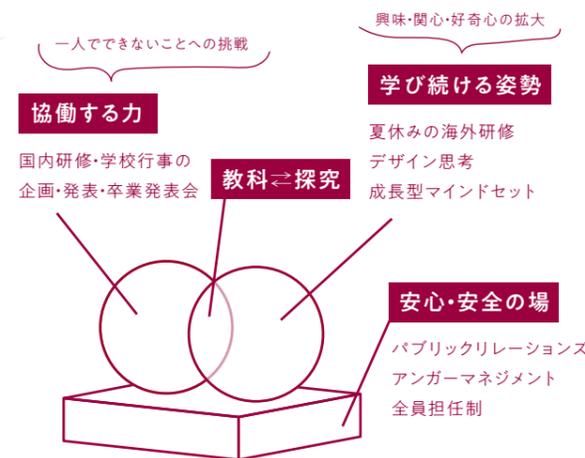
「学びは社会に貢献するためにある」。このコンセプトのもと、数々のプロフェッショナルから与えられるミッションの解決に取り組みます。仮説の立て方、対立や壁の乗り越え方。生徒主導で進んでいく授業を、教員は伴走者として手を添えます。



本科コース

キーワードは、自律。

教科授業と探究授業の往復で、学びの領域や興味、関心を広げ、学び続ける姿勢を身につけます。学びの喜びこそ、次の学びにつながる。多彩なプログラムで視野を広げ、徐々に学びを深めていきます。



グローバルコース (予定)

新たな価値を、世界に届ける。

単に英語や国際理解を育むのではなく、変化の激しい社会で、自ら起業し、世界で活躍するためのスキルを身につけるコースです。サイエンスコースとの連携も図りつつ英語をはじめとした言語発信能力を高めていきます。

FEATURE #02 パブリックリレーションズ

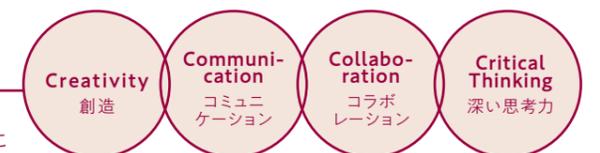
パブリックリレーションズとは、組織と、その組織を取り巻く人間との望ましい関係を作り出すための考え方や行動の在り方。中学校から始まるこの学びでは、価値観の異なるもの同士が共通の目標を合意し、協働して達成するためには、どんなアプローチが必要か?リアルな社会で多くの企業に取り入れられるこの学びを、横浜創英では「道徳」などの一環として学ぶことができます。



FEATURE #03 4Cスキル合宿

学校生活や社会生活のための「4Cスキル」を身につけることを目的に

様々なワークショップを行います。研修では、アイデアを出して意見をまとめてプレゼンテーションを行います。また、意見が対立してもそれを乗り越えて、だれもが納得できる解を見つけられるように、試行錯誤をして対話を繰り返す機会も多くあります。すぐにはうまく進みませんが、失敗をふくめたすべてが貴重な経験になります。



高校 [3年間の学び]

COURSE GUIDE 3つのコース



特進コース

1年次より5(6)教科7科目の大学入学共通テストに対応するために、特進コース独自のカリキュラムを設定。基礎学力の定着とともに、受験に対応する実践的な能力を養成する3年間を過ごします。2年次からは生徒一人ひとりの高い特性に応えるために、多くの選択科目を用意しています。



文理コース

幅広い視野を持って将来の進路を設定できるよう、共通カリキュラムを履修しながら、難関私立大学への進学を実現するための学力も養成するコース。文系・理系に分かれるのは2年次から。自分の描くキャリアに合わせて科目を絞り、効率良く学びを深めます。



普通コース

授業だけでなく学校生活すべてから興味・関心を深められるよう、広くバランスのとれたカリキュラムを編成。生徒一人ひとりの多岐にわたる進路をサポートするために、音楽系、美術系、体育系、保育系、情報系と幅広い選択科目を用意しています。

※高校のコースについては、2025年度に再編する予定です。

MESSAGE 教員から



授業以外から学ぶために、
授業の質を高める。

数学科 安達 祐介先生

短くて、貴重な3年間。「勉強だけを頑張る」では、もったいないと思います。今後、社会を生きていくうえで大切な自己肯定感を高めていくためには、勉強以外にもさまざまな学びや失敗を経験する必要があります。そのため授業では、話し合いを基本とした「深い学び」を実践しています。

PROGRAM 自律した学習者を育てる仕組み

自由選択制度

高校2年・3年で実施する自由選択科目は、「進学準備講座」と「対話・創造型講座」の2つに分類されます。

進学準備講座

各教科の学力充実を図ること、進路実現に必要な学力を伸ばすことを目的とした科目です。目指す進路に応じて、それぞれが必要な教科に取り組みます。

対話・創造型講座

対話と創造に沿った6つのスキル獲得を目指す科目。自ら発見した課題を、学年を超えた協働によって試行錯誤しながら解決していく学びです。

無学年制

この講座では、学年の境を超えてともに学びを深めます。より多様な価値観を持つ人との協働によって、対話的に学ぶ力と姿勢を身につけます。

コラボレーションウィーク

高校1年生の必修科目として、9月の2週目から教科横断的な授業計画を実施して「9つのスキル」の習得を目指します。その成果を文化祭で発表し、教育課程と学校行事の関連を図りながら、生徒の新しい価値を生み出す力を育成します。



ACHIEVEMENT 進学実績 (2021年度卒業生 進学実績)

国公立

12名

- 東京工業大学
- 東京農工大学
- 東京都立大学
- 横浜市立大学
- 神奈川県立保健福祉大学
- 信州大学
- 新潟大学
- 宇都宮大学
- 埼玉大学

難関大学

83名

- 早稲田大学
- 慶應義塾大学
- 上智大学
- 東京理科大学
- 明治大学
- 立教大学
- 青山学院大学
- 中央大学
- 法政大学

準難関大学

82名

- 成蹊大学
- 成城大学
- 明治学院大学
- 國學院大学
- 武蔵大学
- 芝浦工業大学
- 北里大学
- 東京農業大学
- 東京女子大学
- 日本女子大学

有名私大

127名

- 日本大学
- 東洋大学
- 駒澤大学
- 専修大学

Quest

総合的な探究の時間

総合的な探究の時間では、学年ごとに異なるテーマに取り組みます。
学力や知識に留まらない力を養うために、高校時点で社会と向き合う時間です。

1年生 Will Tree

自らの夢や目標と向き合い、
可視化する1年間。

Will Tree は、人生を木に見立てて夢や目標を可視化する活動です。
写真やペンを使い、自分の夢と向き合いながら丁寧に作品を仕上げていくなかで掲げた目標の達成のためにはどんな行動が必要なのか、じっくりと考えていきます。



2年生 Quest Education

企業が抱える課題を、
解決まで導く1年間。

実存する企業と連携しながら職業観を育てるとともに、プレゼンテーション能力を磨く探究学習プログラム「クエストエデュケーション（教育と探求社）」を活用。
2022年度は、イオンリテール・OKAMURA・大和ハウス・メニコン・博報堂・富士通といった、各界を代表する企業と連携しています。
希望するチームは、社会への発信の場となっているクエストカップへの出場にも挑戦できます。
2021年度は、本校の2年生が「クエストカップ2022 全国大会」にオンラインで出場しました。



3年生 World Innovation

自分が抱いた課題意識を、
チームで解決する取り組み。

1・2年次の集大成となる活動が、World Innovation。社会に対する自らの課題意識に気づき、それを改善するための案をチームで考えます。
1・2年次から培ってきた協働力・行動力を存分に発揮しながら、プレゼンテーション力をさらに高めていきます。



EVENT 学校行事

横浜創英の学校行事は、「なぜやるのか」、「どうするのか」、生徒たちが考え、対話し、自分たちの手で、つくりあげています。



ぶつかった時間がいちばん、思い出。

つかれた、楽しかった。
終わってみて、振り返ると、一番覚えているのは、
毎日ぶつかって、言い合って、
それでもいっしょに今日をつくりあげたこと。

CLUB 部活動

部活動は、誰に強制されるものでもありません。
放課後の自由な時間をどう使うかは、自分次第です。



誰のために
走ってるんだっけ。

息もきれた。声もかれた。
もう動きたくない。
それでも「もう1本」って言えたのは
自分で決めて、ここにいるから。

保護者の皆さまへ。

もともと子どもたちは生まれた時は主体的な存在です。
しかし、良かれと思い、手をかければかけるほど
子どもたちの主体性は奪われていきます。
事実これまでの学校は、子どもたちに多くのことを与え続けてきました。

そんな教育をどこかで変えなければ、
社会を創っていく当事者に育てることはできません。
全ての子どもたちが、時に誰かの力を借りながら自分の足で歩いていく。
そんな主体性のある子どもたちを育てていきたいと考えています。
そのために、学校で出会う大人が素敵な存在であり、
持続可能で平和な未来につながっていく……
学校をそんな希望にあふれた場にしていきたいと考えています。

私たちの改革はまだスタート地点に立った状態ですが、
私たちは、この目標に向かって日々チャレンジを続け、確実に歩んでいます。
その道のりは平坦でなく、時に我慢が必要です。
私たちと共にそんな教育を目指していきませんか。



ACCESS



大船駅 (JR東海道本線16分) → 横浜駅 (JR横浜線6分) → 大口駅
大和駅 (相鉄本線急行21分) → 横浜駅 (JR横浜線6分) → 大口駅
川崎駅 (JR京浜東北線12分) → 東神奈川駅 (JR横浜線3分) → 大口駅
町田駅 (JR横浜線26分) → 大口駅
上大岡駅 (京浜急行本線13分) → 横浜駅 (京浜急行本線6分) → 子安駅
武蔵小杉駅 (東急東横線13分) → 妙蓮寺駅

EVENT

学校説明会の詳細・ご予約方法、その他のイベントについては、
本校ホームページをご覧ください。



本校のホームページ上で、
詳しい募集要項を公開しています。





横浜創英中学・高等学校

横浜市神奈川区西大口28番地

TEL:045-421-3121



<https://www.soei.ed.jp/>